

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

地球温暖化について

無

数の微惑星が衝突し、雪だるま式に大きくなった地球は、衝突のエネルギーで温度が上昇し、表面が溶融状態となつてマグマオーシャン(マグマの海洋)を作り出した。微惑星の衝突が収まると地球の表面は急激に冷えはじめ、地球を覆っていた雲は雨となって降り続き低いところへ溜まって海を作ったといふことは前にも述べました。大気圧は急に下がりました。大気といっても現在の大気と違い、主な組成は二酸化炭素と水蒸気です。海水に溶けた二酸化炭素は地表から出てきたカルシウムと化合し、大量の石灰岩を海に堆積しました。

地球の誕生以来長い間無生物の時代が続いた地球上にどのようなメカニズムで生物が発生したかまだよく分かりませんが、最初の化石と思われるものが南アフリカやオーストラリアの約35億年前の地層から発見されています。この生物はシアノバクテリア(藍色細菌)といつて核を持たない下等な藻類の一種ですが、光合成によつて酸素を作り出すことができます。シアノバクテリアはその代謝によつて粘液を分泌し、この粘液に海中の浮遊微粒子が付着して成長し、シアノバクテリアの死骸が

層状に石化してドーム状に成長していきます。これをストロマトライトといいます。その層状構造は日周期、月周期、季節周期、年周期などの期間が記録されているので、当時の環境の周期を知ることが出来ます。例えば今から8億5千万年前は綿の数を数えて、1年が435日であったことも分かっています。サンゴの成長記録からしてもデボン紀(約4億年前頃)には400日くらいだったといわれています。地球の自転が次第に遅くなっていることとちやんと生物たちは記録しています。シアノバクテリアは非常に適応性が強く、先カンブリア代(6億年以上前)には世界各地に生存し巨大な酸素発生装置だったと考えられています。このような太古の生命活動は地球表面の環境を大きく変えました。生物の進化にも大きな影響を与えました。古生代に入ると高等動物の進出により、浅海域での底生微生物は他の動物に捕食されストロマトライトは急に減少していきます。

中を満たし10億年くらい前から大気中の成層圏にオゾン層を形成しました。オゾン層によつて生物に有害な紫外線を遮るようになると、海中の生物が上陸を始め陸上で住むことができるようになりました。ストロマトライトは現在の海では西オーストラリアのシャーク湾、フロリダ半島、バハマ諸島、ベルシャ湾など数ヶ所にしか生息していません。シャーク湾にはストロマトライトの群生があり、20数億年も前からブクブクと酸素を噴出している所があるということです。澄み渡った入江の一角は世界遺産として登録された有名な国立公園になっています。オゾン層ができて陸上にも生物が住めるようになると、葉緑素をもつた植物が陸上に繁茂し大気中の酸素は現在の21%になったのです。地球上の生物が現在の快適な環境で生活できるようになるのは、30億年も前の地球の営みの積み重ねがありました。きれいな海や大気をわずか数十年の間活動によつて温室効果ガスや放射性物質などで汚してしまうということは、やはり天の摂理に反することではないでしょうか。

日平城跡20

歴史調査の楽しみ方

南

西側派生尾根の調査をしていた時に、ふと目をやると小谷を挟んだ東側の小尾根にも遺構がある事に、気づきました。先端部を横側から眺めると、傾斜地を挟り取るようにカットして、小段が造られていました。

これからの説明にあたり、縄張りの呼び名を、⑧南側中央小尾根(以下、⑧小尾根と略します。この箇所の上部分は、小山Bとして、以前に報告済みです)とします。

小山Bの上面は、造成の度合いが高い平場です。長さ26.2m、幅8.6~3.5mの規模があり、遺構(建物跡など)の埋没も予想されます。物見の丘でしょう。この平場の南西端から、今回、話題に取り上げる「⑧小尾根」が下っています。隣の⑦南西側派生尾根と比べた場合、規模の点で、全く問題になりませんが、無視できない地形です。でも、雑木が繁っていた事もあり、小山Bからの見下ろしでは、先端部の小段が、全く分かりませんでした。

それで、伐採が終わり、縮尺400分の1の地形図上で、直線距離にし

て30m下ると、⑧小尾根の先端部に、はつきりとした小段が姿を現しました。

小山Bの平場からは16mの高低差がありました。尾根は、かなりの急斜面です。小段は半月状をなしており、基底部の長さ6.4m、幅2.3mの広さがありました。北東側の法面は、削り落としの痕跡が鮮やかに残っています。一方で、小段の先端下は、急傾斜の尾根となります。ストーンと落ちた状態で、この箇所が⑧小尾根の変化点にあたる事が分かります。

戦士の時は、この小段に数名の守備兵が陣取って、下から攻め登ってくる敵勢を迎え討ったと思われる。上位からの攻撃は、大きな利点があります。石を投げつける事もできます。行動も自由です。少ない人数で陣を守る事ができます。日平城に残る細かな防備施設の一つです。隣の⑦南西側派生尾根から、こちら側に回り込んでくる敵勢を叩く狙いがあったことは、明らかです。用心に用心を重ねたダメ押し施設の施設なのです。築城に際しては、細心の注意が払われている事がわかります。長年、山

城調査をしています。この様な考え抜かれた遺構を発見すると胸が高鳴ります。

5月下旬となると、山城にも初夏を思わせる心地良い風が吹き始めました。2月頃は、木々を大きく揺らす北西からの寒風に縮み上がったものです。今、山肌には若葉が繁っています。この原稿が、広報に掲載される頃は、早や7月。月日の経つのは早いものです。

大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)



南側中央小尾根 小段

